哲学・評論

西田幾多郎（にしだきたろう）

山口市

（1870～1945）

提供・石川県西田幾多郎記念哲学館

【著作】

『善の研究』（明治44・弘道館）

『西田幾多郎全集〈全19巻〉』（昭和22～28・岩波書店）

『西田幾多郎全集〈全24巻〉』（平成14～21・岩波書店）ほか

【閲覧情報】

西田哲学会（石川）　山口西田読書会（山口）

石川県西田幾多郎記念哲学館（石川）　西田・田辺記念講演会（京都）

京都学派アーカイブ（京都）

西田幾多郎博士記念館（寸心荘）（鎌倉）　西田哲学研究会（東京・京都）

西田が山口に来たのは明治三十（一八九七）年九月のことであるが、この年は西田にとって大きな変化があった年でもある。哲学者として名を成さんとすることと家庭生活との間の葛藤で苦しんでいた西田であったが、五月には離婚と免職を経験する。六月から八月にかけて京都妙心寺の大接心に初めて参加。八月末には妻も戻り、山口高等学校（現山口大学）への就職も決まる。

こうして西田は単身山口の地で自己を見つめつつ、本格的に禅の修行を開始する。また西田はマタイ伝第六章の「汝らのうち誰か思い煩いて身の丈一尺を加え得んや」の語に出会い、自分を苦しめていたものは外への関心であったことに気付き、「人が深く深く心の奥を探りて真正の己を得て之と一となるの時あらば、たとい其時間一分時なりとも其生命は永久ならん。何ぞ己が精神を苦めて之の醜肉体を保つの要あらんや」と述べるに至る。十一月十一日のことである。（明治三十年・山本良吉宛書簡）

この頃の西田の立場を表明するのが明治三十一（一八九八）年六月に書かれた「山本安之助君の「宗教と理性」と云う論文を読みて所感を述ぶ」である。この中で西田は次のように述べる。

哲学者は宇宙を見ること最も浅く
又不完全なり、（中略）故に哲学者
にして真に己が目的を達せんと
欲せば、畢竟宗教に入らざれば
能わざるべし。
（旧版『西田幾多郎全集』第十三巻七十六頁）

山口時代の西田は哲学者ではなかったのである。しかしそれは「哲学者にして真に己が目的を達せん」がためであった。山口時代は明治三十二（一八九九）年七月で終わりを告げるが、猛烈な禅の修行（打坐）は明治三十六（一九〇三）年に「無字の公案」を一応透過するまで続く。

その後西田は哲学者としての道を歩み始めるが、悪の問題で躓く。この葛藤の中で宗教的覚悟を含み得る哲学的直観を得る。それが明治三十九（一九〇六）年のことである。その直観をもとに書かれたのが名著『善の研究』である。この書は日本人の手になる初の独自の哲学書として必読の教養書とされた。

西田の立場はその後この書の「純粋経験」の立場から、「自覚」、「場所」と深化したが、基本的な立場はこの書で確立した。

本と眼鏡
（提供・石川県西田幾多郎記念哲学館）

山口高等学校教務嘱託辞令
（提供・石川県西田幾多郎記念哲学館）

西田幾多郎 旧宅（山口市）